



## 山はありといえども

大学入学式式辞

上野直蔵

陽春四月のこのよき日、本学は四千数百名の新しい学生諸君を迎えました。困難な入学試験の関門を突破し、多くの志願者の中から選ばれて、本日この入学式に参列された諸君に対し、本学教職員六百数十名を代表して心から歓迎の意を表したいと思ひます。ご承知のように本学はわが国において最も古くかつ最も新しい大学の一つであります。創立者新島先生がこの相国寺畔の地をトして同志社英学校を開設され、最初八名の学生を迎えて授業を始められたのは明治八年、すなわち今から八十八年以前のことです。ですから諸君は再来年、すなわち、諸君の在学中に創立九十周年の盛大な式典を迎えられるわけです。そのように極めて古く輝かしい歴史と、そしてそれにふさわしい堅実な伝統を有する本学は、同時にまた極めて新しい大学でもあります。と言いますのは、本学は過去八十八年のあいだ、幾多の先輩の尊

い努力を通じてつねに時代の先端を切つて参りました。一日もやむことのない科学の発展、文化文明の向上におくれることなく、つねにそれに速度を合わせて着実に進んで参りました。現在本学は名実ともに最高学府の名に恥じないだけの充実した教授陣と完備した教育施設とを擁し、現実に即した最も新しい学術、いわゆる up-to-date の学術を授けつつあります。その意味で本学は最も古くして同時に最も新しい大学と言われているのではないかと思ふのであります。諸君は今日からこの大学の一員として多くの学友と共に学問の道に進まれるのであります。わたしは諸君のこれからの大学生活が諸君の生涯の最良の時代となるだろうことを信じて疑わないのであります。

では、諸君はどのような心構えをもって諸君の大学生活を送らるべきでありましょうか。わたしはただ一つの希望だけを述べさ

せて頂きたい。それは諸君が大学人にふさわしい知性をもって学問の道に精進され、そしてその精進のうちに限りなき喜びを見いだされることであります。ひと言でいえば、楽しみながら学問する、あるいは学問を享樂する、エンジョイする、これが大切だと言いたいのであります。中国の古典である『論語』のなかに「学びて時に習ふ、亦説ばしからずや」という言葉があります。学問するということは本来喜ばしいことなのであります。しかしことわざには「タデ食う虫も好きずき」と言われますように、人間の性格、また趣味、嗜好は千差万別であります。一方に学問を樂しむとする人もあれば、他方には学問をニガ手とする人もあるわけであります。「学びて時に習ふ、亦説ばしからずや」という孔子の言葉に深い共鳴を感じるためには、われわれの心のうちに、いわば、学問への熱情ともいうべきものがなければならぬのであります。この熱情を全く欠く人には学問はなんらの魅力をも持たないであります。いわば、豚に真珠であり、猫に小判であります。よく言われますように、なぜ危険をおかしてまで山に登るのかという質問に対して、そこに山があるからだ、と答えた人があります。山登りには理窟もヘチマもないということをおうとした面白い言葉だと思えます。しかしむつかしく考えれば、たんにそこに山があるだけでは十分ではありません。そこに山があると共に、さらにまたわれわれの内に山に登りたいというやみがたい衝動がなければならぬのであります。同じことは学問についても言えるかと思えます。過去幾千年、いな幾万年の人類の経験はいまウツ然たる諸学の体系となつてわれわれの前に幟々としてそ

びえ立っています。しかしわれわれの内にそれを求め、それを味わいたいという熾烈な熱望の存しないかぎり、われわれの祖先のこの貴重な遺産も要するに無にひとしいのであります。本日入学された諸君はすべてそうした熱望をもって本学を志望されたのだと信じます。学問せずにはいられない心、真理の探究のうちに無限の喜びを感じる心、——諸君はすべてこうした心の持ち主であると信じます。同志社大学はそうした諸君に対してちようど砂漠のなかのオアシスのようにコンコンと汲めども尽きぬ真理の泉でありたいと願っております。

諸君のうちには学問への熱情がある、したがって諸君は学問をエンジョイする資格は十分に持つていられるわけであります。しかしこの資格を十分に生かして諸君が真に樂しく大学生活を送られるためには、一つの小さい、しかし重要な注意が必要であります。それは学習を中断しないということであります。お伽話に出てくるウサギのように途中で寝込んでしまわないことでもあります。たとえば講義のノートにしても、毎日の講義のたびごとにノートをとることは極めて容易なことであります。しかし毎日の講義をサボツて、十日分、二十日分のノートを一度に書きうつすとなると、これは非常な苦痛であります。毎日四頁あるいは六頁の英語の書物をよむことは比較的容易であり、また大変たのしいことでもあります。しかし十日に一度、あるいは二十日に一度、五十頁の英書を一度に読もうとすると、これは諸君にとって非常な重荷となるだろうと思えます。本来たのしかるべき学問が諸君にとって大きい苦痛となるのはそうした場合なのであります。もち

ろん、病氣その他やむをえない事情の起きた場合は別であります  
が、しかしそうでないかぎり、諸君は断じて学習を中断せず、そ  
の日の勉強をその日の日片づけてゆくように努力さるべき  
であります。これは学問をエンジョイするための第一の要件で  
あります。わたしはそれを「カイコが桑の葉を食べるように」と  
形容したいと思います。カイコは与えられた桑の葉を極めて僅か  
づつ、しかし中断することなく食べてゆく、そして次第に生長し、  
やがて変形してサナギとなる、それと同様に諸君もまた諸君のカ  
テを、精神的なカテを、毎日すこしづつ、しかし中断することな  
く、取り入れてゆくべきであります。さきのウサギに対比すれ  
ば、これはカメの歩みであります。一見たしかに鈍重ではある、  
しかし着実な歩みであります。Slowly, but Steadilyであります  
す。それとちようど正反対の行き方は試験前のいわゆる一夜漬け  
の勉強であります。たとえば、友人から一年分のノートを借りて  
それをネジ鉢巻きで写しとるといった涙ぐましい努力でありま  
す。しかし思うにこれほど愚劣な、無意味な、そして効果のない  
勉強の方法はないだろうと思ひます。それは長い絶食のち一度  
に栄養を取ろうとして暴飲暴食、あるいは牛飲馬食すると同じで  
あります。それでは腹をこわすだけで、何一つとして本当の栄養  
にはならないのであります。わたしは諸君が大学生活を楽しくす  
ごされるために、そうした愚劣な方法をきけて、カイコが桑の葉  
を食べるように、少量づつ、しかし中断することなく、真理の泉  
から諸君のカテを汲みとられることを希望したのであります。

ところで、学問をエンジョイするためには今一つの注意が必要

であります。それは学問を他の何ものかの手段と考えないで、あ  
くまで目的そのものとして追求するという心構えであります。も  
ちろん、人生全体の立場から見れば学問はあるいは人間の生活を  
高めるための一つの手段であるかも知れません。しかし諸君は大  
学の学生であります。そして大学の学生にとって学問はどこまで  
も目的そのものでなければならぬのであります。もしそうでな  
ければ諸君は本當に楽しんで学問することはできないだろうと思  
います。たとえば、釣りの好きな人にとっては、ただ悠然と竿を  
垂れて魚を待つということが目的であり、また無上の楽しみ  
であつて、それ以外に目的もなければ楽しきものないのであります。  
魚を沢山取つて夕食の菜にしようとか、それを売つてお錢に代え  
ようとかいった雑念がはいり込んで釣りの醍醐味は半減してし  
まうのであります。同様に学問もまたあくまでそれ自身として求  
められねばならない。たとえば就職のため、あるいは学位をとる  
ため、といった考え方はたんに学問の純粹性を傷つけるだけでは  
なく、諸君の学習そのものを著しく不愉快なものとするだろうと  
思ひます。もつとも、卒業後の就職ということは多くの諸君にと  
つて大きい関心のマトであるだろうことは、わたしも知らないで  
はありませぬ。本学もこの問題にはとくに力をいれており、就職  
委員会や就職課を設けてできるだけだけの努力を払っているのであり  
ます。しかし極端な言い方をすれば、就職の心配は大学だけがす  
ればいいのであつて、学生たる諸君には何の關係もないのであり  
ます。少なくとも最終学年を迎えるまではそうあるべきでありま  
す。入学早々から四年さきのことを心配するようでは、諸君の大

学生生活はとうてい生涯の最良の時代とはなりえないでしょう。ですから、わたしは就職その他のことは諸君にとって一つの目的であるよりも、むしろ一つの自然的結果たるべきだと考えたいのではありません。諸君は大学在学中、ちょうど釣りを楽しむ人と同様、悠々と無念無想に学問をエンジョイされればよい。それによって諸君は諸君の人間形成を成就される。諸君は同志社人たるにふさわしく知性と良心との全身に充満した人間として完成される。その当然の結果として諸君は卒業のあかつき社会の各方面から要望され、就職の道もおのずから開けてくる。これが望ましい事態だと思ふのであります。逆説的に言えば、就職などを全然問題とせず、ひたすら学問に打ちこみ日々の学習をエンジョイする学生諸君こそ、かえって容易に就職することができる、こうも言えるかと思ふのであります。

以上わたしは学生諸君の本分たる学問のを中心として諸君の大学生活を考えてきたのであります。しかし、もちろんわたしは朝から晩まで机にかじりつけなどというのではありません。諸君はあるいはスポーツに、あるいは、芸術に、あるいは宗教的な活動に、諸君の若々しいエネルギーを心ゆくまで発散さるべきであります。しかし諸君がどのような仕方でも諸君の青春を楽しまされるにせよ、しかもその中心をなすものは常にあくまで学問の享樂でなければならぬ。それを離れて学生たる諸君の生活の意義はない。このことをわたしは強調しようと思ふのであります。諸君といろいろ話し合う機会は今後とも度々あろうと思ふので、今日はこれだけしておきたいと思ふ。 (同志社大学長)

## 新島先生研究参考図書

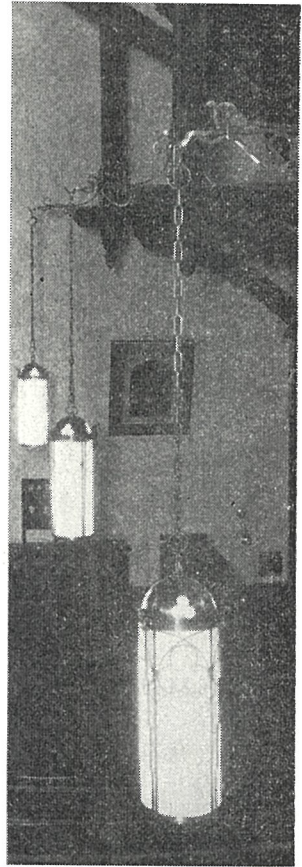
— 新入学生諸君のために —

- 新島先生の伝記、書簡集、言行録および先生を語る文献は多いが、研究の手引として、現在市販の単行本、及び絶版書でも図書館で見られるものうち代表的なものを挙げた。市販のものでも誤記の多いものは特に省いた。
- (1) My Younger Days 同志社校友会刊  
新島先生が恩人ハーディー氏夫妻に提出された、幼少時代から渡米までの自叙記でハーディー著の伝記から抄出した小冊子。
  - (2) 新島襄先生伝 (山本訳、絶版)  
著者デヴィス博士は新島先生の最もよい理解者であった。この伝記は先生の生涯を聖書の予言の実現としてみたもので伝記文学としても極めてすぐれている。
  - (3) 新島襄先生書簡集 (森中章光編) 同志社校友会刊  
附 新島襄詳年譜 (同右編)
  - (4) 新島襄先生書簡集 (同右編) 同志社出版部刊  
附 新島襄書簡集 (同志社編、岩波文庫)  
岩波文庫本は前記(3)中、先生の人格が行間にあふれた代表的書簡九十八通を選び原本又は写真を照合校訂を經たものである。
  - (5) 新島 襄先生 (徳富蘇峯著) 同志社出版部刊  
新島襄、人と思想 (魚木忠一著) 同 右 刊  
新島 襄 (岡本清一著) 同 右 刊  
新島先生記念集 (校友会編) 同志社校友会刊  
雑誌、新島研究 季 刊 新島研究会刊



# 意味実現の場 としてのの大学

大学が共同体であるといわれる場合、それにはいろいろな把握方法があると思うが、わたくしは、ここでは、それを意味実現の場として把握してみたい。人間は誰でも意味を求めて生きる意味的存在であるが、その人間存在の意味というものは、決して孤立的に実現され得るものではなく、特定の意識をもったグループに属し、その意味創造の働きに参与することによってのみ、実現され得るものである。そして、その場合、われわれの属するグループには、血縁社会や民族のように、われわれが生まれながらにしてそれに属している、勝手に選択することのできないものと、会社や学校のように、ある程度自由に選択できるものがある。そして、後者の場合には、その選択の行為そのものが、意味実現の行為として、多かれ少なかれ、われわれに喜びを与えるものであると同時に、またそれに



土 居 真 俊

相応する責任を負わせるものである。いずれにしても、われわれが特定のグループに属し、そのことによって自己の存在の意味を実現し、生きる喜びを味うためには、そのグループの担っている意味意識を自己の意味意識とし、それが志向している意味の実現を自己の課題として引受けるということがなければならぬ。具体的に言えば、同志社人になり切るということなしには、同志社に働くことへの喜びは湧いてこないし、したがって、また自己の存在の意味も十分には満たされ得ないということになるであろう。またそれを裏返えしていえば、同志社は、それは単に経営者だけの責任ではなく、われわれ同志社人全体の責任であるが、それを構成するメンバー、すなわち、教職員、学生の一人一人に自己の存在の意味を実現する機会を与え、意味実現の場となることによってのみ、その存在の意

義をもつということになるであろう。

さて、同志社人になり切るといふことは、単に同志社がもっている文化的遺産を後生大事に守るといふことを意味しない。シカゴ大学のワイマン教授は「創造された善」と「創造する善」とを区別し、「創造された善」は古び置き去られることがあつても、「創造する善」は常に新たに意味を創造する生命力であるから、永遠に亡びることがないといつてゐるが、新島先生がわれわれに遺こされた真の遺産は、文化的形骸ではなくして、時代に即応して常に新たに人間存在の意味を実現していく創造力であり、それを供給するものとしてのキリスト教であると思う。

さて、大学共同体としての同志社の使命は人間形成ということと真理の探究ということであろう。特にこの人間形成という面は、新島先生以来、「人格主義教育」として、同志社が特に力を入れてきた点である。しかし、その意味内容については、時代の変化とともに多少の推移のあることを認めなければならぬ。昔は「人格主義教育」といえば、「桃李もの言わざれども下自ら蹊をなす」といった具合に、上に立つ者が有徳の士であれば、下々の者は自らそれに倣つて身を正すようになるというふうにかえられていた。そして今日においても、ゼミにおける教師と学生との接触などにみられるように、そういう面がないではないが、大学が巨大化した今日では、そういう教育理念だけではやっていけなくなつてゐる。またキリスト教的観点からいえば、一人一人の存在はかけがえもなく尊い意味をもつたものであるから、教師たる者は、成績素行のよしあしにかかわらず、一人一人の学生を懇切丁寧に教え導かなければならない。

これは今日においても、教師に課せられた至上命令であるけれども、今日のようなマス・プロの条件の下では、その課題を十分に果たすことができないうところに教師の悩みがあるのであるまいか。人格教育の第三の理念は group dynamics の理論ともいべきもので、人格というものは、先に述べたような、グループ生活への創造的参与を通してのみ形成されるということである。そこで新島先生のいわれた「自由教育」ということが、非常に重要な意味をもつてくる。なぜなら、人間形成ということは、人格主義の立場からいふならば、決して特定の社会に合う規格品を作ることであつてはならず、いかなる状況の下においても、自由を正しく行使することのできる男女を作ることであつて、そのような自由人は、自由でダイナミックな共同社会においてのみ形成され得るものであるからである。もちろん、そのような自由な共同社会はまた同時に秩序ある共同社会であつて、秩序のないところに、自由の行使が不可能であることはいふまでもない。

次に真理探究の場としての大学共同体であるが、わたくしは人格形成ということと真理の探究ということとを一本にして考えている。なぜなら、学問は、文化科学であつても、自然科学であつても、所詮は人間の学であつて、人間による意味探究の働きにはかならないからである。今日の悲劇は、むしろ、学問の主体である「人間」と、その客体である「真理」とが切り離され、一方ではある種の実存主義にみられるような主観主義が横行するかと思えば、他方では極度の客観主義から、学問する科学者の主体性が稀薄になり、遂にはフランケンシュタインの物語にみられるように主客の立場が

顛倒して、人間理性の産物である科学的成果が、かえって人間の存在を脅かす結果になっているという点にあるのではあるまいか。そこで、今日重要なことは、学問における人間の主体性が確立され、学問が人間存在の意味の実現のために存在するという真理が再確認されることである。

また今日は学問における専門分野の細分化に伴って、学者間の会話が不可能になっている。そして、そのことが共同体としての大学の成立を困難にしているといわれているが、わたくしは、すべての学問を、人間による、人間のための、意味探究の営みとしてみるときに、この問題は解決すると思う。すなわち、「存在の意味」ということに焦点を合わせるときに、各専門科学の間の会話が成立し、またそういう観点から学問体系論というようなものが可能になると思う。そこに大学といわれることの意味があるのである。

教育的見地からいえば、科学の学生が実験台に向う場合と、神学生が聖書に向う場合とは共通した「生真面目さ」がなければならぬ。なぜなら、両者共に究極的に意味あるものを志向しているはずであるからである。そして、そういう「生真面目さ」こそわれわれの人格の中核をなすものであるから、わたくしは、ほかの方法を排除するわけではないが、人格教育の中心な場は教室であると思っっている。イエール大学のカルフーン教授は、高等教育の指標は「訓練された知性、学問の自由、批判的精神、明確な世界観への忠誠」といつているが、これは神学部にも、工学部の学生にも、経済学部の学生にもその他いずれの学部の学生にも通用する特徴でなければならぬと思う。

大学における宗教教育については、あまり多くを語る時間をもたないが、現代文明の根本的な病患の一つは宗教と文化との分離ということである。そして、その責任の一斑は宗教の側にもあるということができよう。なぜなら、現代の世俗主義は、現代科学の進歩に耳をかきしないで、頑強に前近代的な世界観を固執し、それを押しつけようとするとする教会の権威主義に対する反動として起こったとも解することができるからである。しかし、現代の世俗主義に対する責任は科学文明のものの中にもある。それは科学文明の「自己充足性」ということであって、自然科学が発達し、自然に対する人間の支配力が増大するとともに、人々は次第に自然科学的認識方法が唯一の認識方法であり、人間は、宗教の助けを借りずして、人間存在の意味を充足することができるの確信を強めるに至った。その結果、宗教は、前近代的遺産として、文化生活の片隅に押しやられるに至ったのである。この傾向は唯物思想の発達とともに益々強化され、今日キリスト教主義大学は別として、或る種の大学においては、「進歩的」ということと「唯物論的」ということが、ほとんど同義的に解され、その結果、大学が世俗主義の温床と化している観がないではない。しかし、この科学主義（科学の絶対化、したがって、真に科学的ではない）に基づく宗教の蔑視は二つの点において誤っていると思われる。その第一は人間を究極の意味の探究へとかり立てる意味の根源から自己を切り離し、そのことによって自ら真理探究の能力を弱めているということ、第二には自己のもっている認識能力が有限であり、したがって、相対的なものであるということについての認識を欠いているということである。そこで、われわれは、

真に科学的であるためには、人間存在の意味は多次元的であり、したがって、特定の科学的認識方法だけでは把握し尽くすことのできない次元があるということ、また人間の認識能力は相対的なものであるから、常に存在そのものの自己開示、すなわち、存在と意味の根源に対して謙虚に自己を開いていなければならない、ということを知らなければならないであろう。もし、前述のように人間精神の働きは、人がそれを意識しているといないとにかかわらず、究極的意味の探究へと志向されているということが承認されるならば、そして、もし宗教とは究極的に意味ある実在に究極的に関わり合っている状態であるとするならば、聖と俗との境界線は撤去され、宗教は、科学をも含めて、すべての文化活動を究極的意味の探究へとかり立てる根源的力として、再び文化の中に正当に位置づけられることになるであろう。

結論的にいえば、意味実現の場としての大学に応わしい宗教は、理性の働きを圧迫するような宗教ではなく、むしろ、理性とその根源との一致を妨げている障害を取り除き、理性を究極的意味の探究へとかり立てる創造力を開放するような宗教でなければならないと思うのである。

(神学部教授、組織神学)

(一九六三、三、十一、大学宗教部主催  
の教師懇談会における発題講演要旨)

## 大学宗教部だより

大学宗教部の最近のニュースをお知らせします。

**談話室新設**……宗教センターの事務室と隣室の壁に通路をあけ、従来の事務室を「談話室」にし、事務室を隣に移しました。

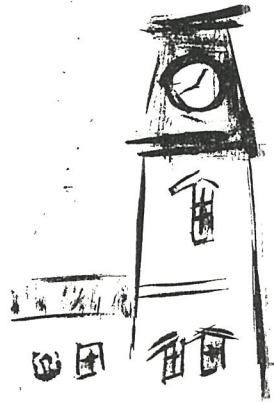
ここには学生諸君や先生方にも自由に出入りしていただいております。お茶でも飲みながら語りあいたいとおもいます。

**宗教部報第四号**……五月初めに発行する号の内容は土居真俊神学部教授の論説、作家の椎名麟三氏と笠原芳光宗教部主事の対談、井ヶ田良治法学部教授のエッセイなどです。御期待ください。

**正午礼拝発足**……チャペル・アワリーのほかに毎週金曜日の午後十二時三十分から四十五分までの十五分間、神学部チャペルにて「正午礼拝」を始めます。おもに学内キリスト者の先生に話をしていただきますが、月一回は学生諸君にも担当してもらいます。学生聖歌隊にも讃美歌の奉仕を願ひ、短かくても豊かな、また新鮮な礼拝のひとつにしたいと願っています。

四月二十六日開始。





## 新島先生と大西祝博士の「良心論」

田 畑 忍

新島先生は、明治八年、良心至上主義の教育精神に燃えて、洛北の地に同志社を創設された。「吾が生一たび精神の到るを得ば、何事か人間為して成らざらん、願はくば歐洲文物の本を立てんと、試みに初む日本の旧都城」という漢詩は、その時の先生の心意気を示すものである。

もちろん、新島先生の良心至上主義は内容的にはキリスト教的自由主義と自治主義であり、人間尊重・個人尊重をその目的としているものであって、これこそ欧州文物の大本たるキリスト教の真髄だと、先生は考えられているのである。先生はその手紙に、「自由自治の春風常に吹きをり候よういたしたく候」と書き、また「自由教会、自治教育、併せて国家万々歳」とも言われていたのである。従って先生は、また平等主義を徹底して実践された。逆の面から言うると、先生ほど形式主義・官僚主義・権力主義を嫌った人はいないで

あろう。平たい言葉で言えば、「悪を挫いて善を助ける」、という性質が先生の核心的なキャラクターであった。「一枝を切らば、一指を斬る」という制札に憤激して、桜樹をめったぎりにされたという少年時代のその土性骨とヴァイタリティーが、新島精神を形づくっているのである。

それ故、先生は、同志社を、かような意味においての「国の良心」を育成する教育の場にしよう、とされたのである。すなわち、「良心を手腕に運用せよ」と叫び、「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」と念じ、「堅固なる良心」または「クリスチャンらしき良心」と言い、「良心一点の雲もなく身を真理に任せ」と言い、「良心を真理に照準せよ」と仰言ったのである。また、「国民の良心を陶冶すべき責任」を自らの責任となし、常に「良心の光明に照らして」行動されたのである。そのキリスト教主義大学必要論を展開されている檄文『同志社大学設立の旨意』や書翰集を

読む者は、何人も先生のこの良心に啓発を受けざるを得ない。しかも先生の良心至上主義は戦闘的である。「主義と立ち主義と斃れん我が身なり、浪華の夢の世にしあらねば」と言う和歌にも、また「男子一戦してやむなかれ、再戦してやむなかれ、三戦してやむなかれ、刀折れ矢つきてやむなかれ、骨くじけ血つきてやむべきのみ、真理のために抛つにあらずんば、吾人の生命もまた空しからずや」と言うアッピールにも、真に強き戦闘的人生観が充満していることを感じざるを得ない。

新島先生の教育を受けて世の塩となった多くの先輩のうち、例えば、新島先生の良心至上主義を政治と社会に実現しようとした安部磯雄先生は、平和主義の学者となり政治家になって新島先生の期待に応えた人物である。またそれを哲学的に体系づけようとしたのが、学界人として終始した大西祝博士であった、と私は考えている。

ここでは、新島先生の良心至上主義との関連において、大西博士の「良心論」について述べることにする。

## 二

大西 祝博士  
大西博士は、元治元年岡山で生まれ、

それにちなんで操山と号するにいたつた。同志社には明治十年から十七年まで



の八年間を在学して普通科と神学科を終了した。のち東大文科に進学して、哲学・倫理学を専攻した。すなわち十七年より二十二年まで東大に在学して大学院の研究となった。更に二十四年より三十一年にいたるまでの間、早稲田専門学校の教壇に立つて哲学関係の講義を担当した。その傍ら、先進学院・高等師範学校の講師ともなつたほか、「六合雜誌」を編集し、また文筆と著作に精進された。すなわち和歌をつくり文学なども論じる多彩の活躍をした。この著作活動が、早稲田での門人・綱島梁川、五十嵐力等々の編集によって刊行された『大西祝全集』七巻となったのである。すなわち、『良心起源論』『西洋哲学史』上下、『倫理学史』『倫理学』時論、評論、歌集等が、その中に含まれている。明治三十一年、彼は文部省留学生としてドイツに留学して、イエナ大学およびライプチヒグ大学に学んだ。しかるに、ライプチヒグにおいてインフルエンザにかかり、次で神経衰弱症を併発して、三十二年に帰国した。同年、博士会によって文学博士に推薦され、三十三年三月文科創設のため京都大学教授として赴任したが、間もなく神経衰弱症の再発により岡山に帰郷し、十一月二日腹膜炎のために、ついに逝去された。享年三十有六歳であった。京大文科はかくして大西博士を失ない、西田幾多郎博士を、その後任に得たのである。

大西博士の人と性格については、新島先生を最も敬愛した徳富猪一郎氏が次ぎのごとくに言っている。曰く、「余は君が如き美質は、未だ多く之を見たることなし。一点の鄙野なるなく、虚傲なるなく、きりとて矯激拂戻なることなく、玲瓏秋空の如き頭脳と、温暖春風の如き心腸とは、併せて君に於て之を見たり。所謂甘美なる合

理的の性情は、君殆ど之を涵養し得たるが如し。マシウ・アルノルド嘗て哲学者を論じて曰く、彼にして偉大ならんとせば、新奇較著なる觀念と言説とを以て、一世の思想を刺激するのみならず、亦自ら他の品性を感化し、他を啓発する或物を有せざる可らず。約言すれば、彼れ自ら崇高高尚なる品性を有せざる可らずと。天若し年を假さば、大西君は恰も其の人たりしならむ。然も今日に於ても、其の品性の此の如くありしは、君が交遊の均く認むる所なり。但だ其の学問は既に半ば成熟したるも、未だ収獲に及ばず、空く其人と与に、墓中に葬られ、且つ其の感化も、普く社会に及ぶ機会なかりしは、吾人が痛嘆する所なり。然も此の如き品性と教養とは、長へに君が交遊したる人士の記念に存す可し」（『人物偶評』）と。もつてよく大西博士の人柄を知ることができよう。

また新島先生が、かくのごとき大西博士に最大の期待をよせられたことは、むしろ当然と言えよう。すなわち同志社大学に、彼を迎えるために、ドイツに送ろうと考えられていたことが、その大学募金日記（二十二年三月十二日）によつて推知されている（森中章光『新島研究』）。その日記には、大西博士提出の条件と先生の寛容とが示されていて、頗る興味が深い。すなわち、大西「氏の注文する所は、自由に其の説を述べて、教ゆる事を許されたき事、又一定のドグマを以て其の教授を檢束せんよりは、寧ろプラクチカルパイエティ

山文  
あはれまわくのやまわたり  
うひにれもあつけれふ祝

ー（Practical piety）を以て、前途の基督教を拡張致したき旨申来れり。予よりは、金森氏迄同氏の意見に任ずるは、小生の尤望む所なりと申遣せり」と、そこに記されているからである。

しかし先生は、翌二十三年一月二十三日、大学の建設を目前にして昇天され、同志社はたちまち衰微するにいたつた。自然、大西博士の教授実現も不可能となつたわけである。

### 三

大西博士の「良心論」は、主として、その著『良心起源論』の中に展開されている。

『良心起源論』は、元来、明治二十三年、その学位論文として執筆されたものである。しかもその意に満ちずして未提出のまま、のち度々加筆をされていたが、ついに遺稿となつたものである。一時、ドイツ語訳を刊行しようともされたことがあり、これも果されずに終つた。いわゆる野心作ながら一箇の未完成論文と言えよう。

この他、「良心の意義を論ず」（二十七年『六合雜』）、「進歩と道德」（二十七年『教育時』）、「宗教と道德」（二十九年『反省雜』）、「倫理学」等（論『二四六号』）が、その良心論を知る上に参考にするべき文献であるが、間接的にはその全著作が関連をもつていると言えよう。

『良心起源論』は、緒言・前論・本論・余論および附録の五部門より構成されている。殊に前論は「良心とは何ぞや」について論じ、本論において、「良心の起源」を詳論されている。博士に従えば、良心とは「道德的心識」であり、義務の念並びに善惡の判別に現わるる全心の作用であつて、「吾人が心の全体の作用（即ち知情意より成れる作用）に外なら」ない。すなわち「吾人が心の全体の

作用」または「能力」が良心である、とせられている（同書、三六・  
またこれを、のちには「理性」である、と説かれるにいたった  
「良心とは何  
（その）参照」）。

最初、大西博士は、イマヌエル・カントをも批判しながら、良心  
を意識の全的作用だとされ、のちにはカント流にこれを理性とみる  
にいたったと言える。すなわちカントは、良心と道徳感を区別し、  
また道徳律を峻別し、道徳律に接する毎に、義務をかかけて、これ  
に順うを允し、これに逆ろうを允さざる理性、すなわち実践理性を  
良心であるとし、行為が道徳律に合し、もしくは反するという意識よ  
り生ずる快または不快感をもって道徳感なりとしたのであるが、博  
士は、最初はカントのかような見解では良心の平安の説明ができな  
いと論じたのである。しかし良心を全心の作用たとなしつつ、良心  
の感覺、良心の命令、良心の声・道徳感・良心の衝動・道徳上の束  
縛、内部的の束縛意識・感性的には快不快の感を伴う、ということ  
などについて明確な区別を立てず、また良心に従ったときには良心  
の嘉賞すなわち良心の平安がある、といった説明をされる大西博士  
の場合には、カントの厳正な峻別がなく、概念の広さと融通さとは  
あるが、いささか混乱をまねがれていない感じがするのである。  
大西博士の良心論の独自性はその良心起源論にある。博士はすな  
わち、良心の起源について、良心を心の全体の作用とみる立場か  
ら、既存の諸説を仔細に検討批判してこれを不十分だとされる。す  
なわち、知・情分析論を否定し、一定不変説を否定し、生来具有説  
を否定し、社会的生産説を否定し、外界的制裁・外界的強迫説を否  
定し、習慣連想説を否定し、遺伝的経験説を否定し、利己的本能説

を否定し、利他的性情説を否定し、単純本能説を否定し、また想念  
的感覺説を否定されるのである。その鋭鋒あたるべからざる概があ  
る。そして、その起源については、その着眼点を良心と廉恥心との  
関係に置くべきであるとする見地から、良心は理想に起源するもの  
だと断定される。すなわち、理想（善・ゾレン・本来の目的）を  
吾人の全心につくり出すことが良心の起源である、と言う一種の理  
想主義的命題をその結論にされているのである（同書、一二七）の  
みならず博士は、これらのものの進歩発展を予想される。すなわ  
ち、博士の良心論は、何事も制限の下にあり、何事も不完全なも  
のである以上、何事にも誤りなきを保しがたい。従って、良心また誤  
りなきにしもあらず、とする思想に拠っているのである。かくして  
それは、良心発展論（同書一六〇頁、）を伴った一種の相対主義的良  
心論である、と言うことができよう。従って絶対的良心論ではな  
い、と言わねばならない。

その点、新島先生の良心思想は、宗教的直感的絶対論的であっ  
て、大西博士の未完成の良心論は、その学問的体系にもかかわらず、  
本質的には新島先生の思想の域に到達しているとは言いがた  
い、と私は考える。殊に博士が、「良心の作用を神命に帰する要な  
し」（同書、一五）とされている点も、キリスト教の信仰に徹底した  
新島先生の「良心神命観」とはおよそ異なっているところである。  
すなわち新島先生の場合には、「良心を真理に照準せしめる」こと  
にウエートが置かれているからである。

#### 四

言うまでもなく私は、この問題についての専門家ではない。ある



いは、「良心起源論」の読み誤りをしているかも知れないことをおそれる。しかし日本国憲法第十九条に「良心」の自由権の規定があり、また第七十六条第三項に裁判官について特に「良心」に従つて裁判にあたるべきことを要請した規定が設けられている関係上、その点からも良心論は憲法上の問題になつてゐるのであり、私もまた無関心であることを許されず、若干の見解を発表してゐるのである（拙著「日本国憲法条義」および拙稿「憲法第十九条の良心」と憲法第七十六条三項の「良心」について」等参照）。私は次ぎのように言つてゐる。曰く「良心とは人の道徳的判斷の基準を司ぶる靈能をいう。「良知」・「良能」・「良識」等といわれることもある。すなわちこれらのものは、人の内心の作用であり、人間を人間として存在せしめてゐる人格的根源をなすものであつて、いわゆる「神知靈覺」を泉のごとくに湧かしめる心であるが、常に「天」または「神」または「真理」に照準されていなければ、それ自体を失なう性質を有してゐる」（前掲拙著「一三三頁」）。「そのように規定をしてゐるさい、私は新島襄校祖の言つた「良心を真理に照準せしめよ」と言う提言や、「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らんことを」と言う祈願を想起してゐるのである。「常にカントをして驚異と敬虔の念を感じしめた道徳律に対応するものは「実践理性」または「良心」であつて、決して「純粹理性」または「知識・思想ではない」（前掲参照）。

また私は、「良心」と「私心」との関係、「良心衰弱」の問題をとくに考察する必要があると考えてゐる。すでに「私心」の問題については、私はそれを「良心」の主観主義的解釈に関連があると思つて、例えば、「主観的良心主義の解釈が妥当でない理由は、主観主義

は、極端な場合には客観的であるべき良心を恣意に走らせ、普通には、違憲の法律に妥協する傾向に陥らしめ易く」（拙著「憲法重要問法権の独立」）、それは「私心主義ということになり、結局は「良心」の反対物たる「悪心」主義ということにもなる」（拙稿「憲法第十九条の「良心」について」参照）、と述べてゐるのである。ただし、「良心衰弱」の問題については未だ執筆したものをもつてゐない。

（注）この拙稿は、去る二月十二日、新島先生誕生記念のために行なつた毎日新聞ホールでの講演の筋書である。（法学部教授、憲法・政治学）

### 憲法・政治学思想入門春季講座

五月 四日（主）	神大教授 塩尻 公明	同大助教授 西尾 昭
五月 十一日（主）	神大助教授 和田 鶴藏	同大教授 高橋 虔
五月 十八日（主）	同大教授 和田 洋一	立命大助教授 山手 治之
五月 二十五日（主）	同大教授 坂本 仁作	同大講師 大谷 実
六月 一日（主）	同大教授 嶋田啓一郎	立命大教授 前田 一良
六月 八日（主）	大阪大学教授 矢崎 光圀	同大教授 田畑 忍
六月 十五日（主）	同大講師 八田良太郎	同大教授 田畑 忍
六月 二十二日（主）	同大講師 畑 肇	立命大教授 姫野 誠二
六月 二十九日（主）	同大教授 秋山 哲治	立命大議長 末川 博
七月 六日（主）	同大教授 吉田 恵	同大教授 土井多賀子
講座要領	京大教授 重沢 俊郎	
時	昭和三十八年五月四日（土）より七月六日（土）まで	
所	明德館一番教室	
毎土曜日	午後四時より七時まで	

会費 全二十講座聴講料 五〇〇円 各回聴講料 一〇〇円  
お申込・問合せは 同志社大学法学部研究室 憲法研究所